

特集 不安を超える② まじない・日の良し悪し

関して因果関係を問題にする時には、「責任」という意味も含まれていません。「あの人が原因だ」という場合は「あの人が責任がある」という意味が含まれていません。実は、私たち宗門は、いわれのない偏見や差別について、あなたの前世の種まきの報いなのだと「あきらめ」を説いて、それを肯定・助長してきた歴史があります。その反省に立つて教えを見直すと、種まき(責任)については、個人の種まき(不共業)と自己の属する社会の種まき(共業)とがあります。考えてみると、人生のさまざまな出来事に関しては、「個人の種まき」というよりも、ほとんどが「共業」(社会によって作られるもの)と言ってもよいのではないのでしょうか。社会の種まき(共業)でありながら個人の責任

(不共業)にしてしまったり、タバコを吸いながら神さまのせいにしてたりするなど、正しく因果を見ずええ(ことは困難ですが、つまるところ仏教は、自己の人生に対する責任と、自己の属する社会に対する責任について、それらを正しく見据え、そしてそれを担い、応答してゆくことを教えているのだと思います。

非在証明

さて「友引」や「三月越しの四十九日」について、その根拠が「オカシイ」ということを説明しても、「どうですね、じゃあこれからは日の良し悪しを言うのはやめましょう」と、納得されるばかりではありません。せん。それは、たとえ根も葉もないデマだということが分かっても、「私の時だけはそうなるかもしれない」という「不安が解消していないからだ」と思います。本来「因果関係がない」ものであったとして

も、その「ない」ということを「ない」と証明することはできない(非在証明)のだそうです。実証的に「絶対そんなこと(因果関係はない)誰も死なない」と証明できないとすれば、この不安はどうすれば超

えられるのでしょうか。他人の言うとおりにして友引を避けさえすれば、誰も死なない(と安心できる)のでしょうか。

不安(有無)を超える

「トサあ大変逃げまじょうト」(至心幼稚園のお遊戯)。臆病者のウサギが、大きな音を聞いて、これはきつと地球が壊れてしまふ音に違いないと勘違いしました。ウサギからそのことを聞いた動物たちは、口々に「大変だ」と大騒ぎし、森の中が大パニックになります。しかし、森の王様であるライオンは、その話をすぐに鵜呑みにせず、大騒ぎする者たちに、そのことを誰から聞いたのか、誰がその音を聞いたのかを、じっくりとたどって突きとめてゆきまかす。最後に、うさぎの証言をもとに確かめに行く、実は、大きな木の実が落ちた音だったということが判明するのです。(『ジャータカ』(お釈迦さまの説話集)1)



この人知の及ばない世界の有無(死後の世界、霊魂の有無)について、お釈迦さまは、あえてお答えになりませんでした。そのかわりに「毒矢の譬え」を説かれました。「ある人が毒矢に射られて苦しんでいるとしよう。かれの親友、親族などは、彼のために医者を迎えにやるであろう。しかし矢に当たった当人が、「私を射た者の身分、姓名、背丈、皮膚の色、弓の強さや矢の形などが分からない間は、矢を抜き取ってはならない」と言ったとしよう。こ

の人はこういうことを知り得ないから、やがては死んでしまふであろう。」「マジマニカーヤ」(村元訳・取意)

また、有ると断定すること、無いと断定することも「苦しみをともない、破壊をともない、悩みをともない、煩悶をともなう。」と言われ、さらに、たとえ実際に有つても無くても私たちは清らかな行いを実践しないし、有つても無くても、現実には「生、老、死、憂い、苦痛、嘆き、悩み、悶え」がある。「人の知り得ない」世界の有無について「いずれも煩悶を制し滅すること、心の平安、勝れた英知、安らぎのためにならない」と説かれています(前掲書)。「心の平安」「安らぎ」のために、「知り得ない」こと(日の良し悪し・まじない)に励んでも、家族を犠牲にし、他人の悪口を言いながら生活しているし、現実的に「嘆き、悩み、悶え」がある。「心の平安」「安らぎ」のためには、毒矢を抜くことが大切であるというわけです。

親鸞さまは(正信偈和讃でお馴染みですが)「解脱の光輪きわもなし、光輪かぶるものはみな有無をはなるとのべたまふ」と、阿弥陀さまの智慧の光に触れる(教えを聞くもの)は、有るとか無いとかをはなれた、もうひとつの生き方が開かれるのだぞ、と教えられました。因果(責任)を正しく見る智慧の信心で不安を超えていく道を示されました。



去る六月行われた第五回広島真宗カウンスリング学習会の様子。写真は講師の松岡宗淳先生。「どんなに深刻な悩みをもち、苦しみに沈もうとも、それを聞いてくれる友、ともに語り合う友をもち、世界を持つ限り、人間は決して絶望しないものです。逆に、どんなささいな悩みであっても、誰もわかってくれるもんかと自分の心を固く閉ざして孤立するとき、それは耐え難い重石となって命を押しつぶしてしまいます。釈尊は慈悲の心を「わが善き親友なり」とよび、決して指導者とは名をなされていません。悩む者の友となり、友になつてもらう。ここに仏教がめざす人間関係の原点があり、真宗カウンスリングはこの釈尊の心にこそ深く学ぼうとしています。」